東京日々新聞

九百七十八号

長月小月村の京泊りと云ふ所の長谷川熊吉と云ふ者の女房おせゑは去年十月ころより阿部の晴明とか云ふ狐が乗り移りたりて色〻妙なる事ども云ひ觸らけるが近村の人まで聞き傳へて何らそれ災を免れ散らし去年十月ふの火の雨が降り火の風が吹きて世界がこゝも黒土と成るなどと

稲荷の社に建立して小豆飯や油揚を備へて鼠の油煎なのお洗米ごのと躁ぎ立てるが國中の大評判となり参詣する老引も切らず炎熱と下て黄へば何の様な病氣でも治ると云ひ或い手の相を見て黄へば運の吉凶が別るゝなどと持て囃して蟻の如く集りけるが風と或る人より蜀稲荷まいまぐ官位がゑいから京都へ位を受けに行くが嫌いと云ふ相談が始まりて商人仲間で何程かの金を調へ去年一月中旬ふかせゑい亭主熊吉と隣りの金六が女房おすゑと連れ船よりて出帆せしが備後の尾道迄て上陸して或る酒樓にて路用を皆飲んで仕舞ひ上京する事も出来ず詮方も無く成りて遂に帰る事も成ぬ三人倶に道々南無妙法蓮華經〻と唱へて人の門に立つて稍〻藝州の廣島まで帰り來り暫らく

る様ふと祈請して京泊よ

云ひ觸らけるが近村の人まで聞き傳へて何らそれ災を免れ散らし去年十月ふの火の雨が降り火の風が吹きて世界がこゝも黒土と成るなどと

長谷川熊吉と云ふ者の女房おせゑは去年十月ころより阿部の晴明とか云ふ狐が乗り移りたりて色〻妙なる事ども云ひ觸らけるが近村の人まで聞き傳へて何らそれ災を免れ散らし去年十月ふの火の雨が降り火の風が吹きて世界がこゝも黒土と成るなどと

毎晩百度宛て拝して無病と祈なす為稲荷様も人の身の吉凶禍福いろ〻と御お告げ成されて随分人〻と魅し奉る神様も人間の恵に恩来の身と見なせて百度は魅されぬ奇詮と申そうな悪神と申そうな呆れ返ります

人形町 具足屋 渡辺彫栄